

令和元年度第1回平泉町総合教育会議

日時：令和元年 7月23日（火）

午前10時00分

場所：庁議室

次 第

- 1 開 会
- 2 挨拶 平泉町長
- 3 協 議
（1）就学前からの教育について
- 4 その他
- 5 閉 会

令和元年度第1回平泉町総合教育会議

協議題とその協議項目

協議題

「就学前からの教育について」

協議項目

- 1 子どもの育ちの現状について
- 2 関係部署等における取り組み状況について
- 3 就学前からの教育の取り組みについて

令和元年度第1回平泉町総合教育会議出席者名簿

区分	職名	氏名
構成員	平泉町長	青木 幸保
	平泉町教育委員会教育長	岩 渕 実
	平泉町教育委員会 教育長職務代理者	本 澤 京 子
	平泉町教育委員会委員	三 澤 恒
	平泉町教育委員会委員	山 平 功 二
	平泉町教育委員会委員	三 浦 英 子
関係職員	平泉町立長島小学校長	高 橋 彰
	町立幼稚園長（兼平泉保育所長）	佐 藤 京 子
	長島保育所長	千 葉 よし子
	町民福祉課長	千 葉 多嘉男
	保健センター所長	高 橋 和 夫
	適応支援相談員	阿 部 ひとみ
事務局	教育委員会事務局教育次長	千 葉 幸 一
	教育委員会事務局教育次長補佐	千 葉 数 馬
	教育委員会事務局指導主事	佃 智 之

令和元年度第1回平泉町総合教育会議会議録

日時：令和元年 7月23日（火）

午前10時00分

場所：庁議室

（千葉教育次長）

只今より、令和元年度第1回平泉町総合教育会議を開会いたします。

町長よりご挨拶をいただきたいと思っております。

（青木町長）

色々な角度から、ご指導いただいていることに改めまして感謝を申し上げますとともに、ご指導かつそれに関わりながら、様々なご助言、ご提案等いただき、なおかつやはり、教育現場ですから、実はあの時こう思っていたけれどもということになっていかないで、思った時、感じた時に提供していただき、即座に対応できる、そういう現場が今後さらに求められるというものだという風に思っています。そういった意味では、皆さんとともに情報を共有するという事は、本当に自分たちにとってというよりも、そこに携わる子ども達、生徒たちにとっても、児童生徒皆さんにとって、本当に喫緊の課題のことが現場には起きてきております。それをきちんと私たちが、即座にキャッチしながら、なおかつ、よりよき方向を目指しながら、対応していくというのは、今どの自治体にとっても、大変大ごとなところだというふうに思っております。特に今回のテーマにつきましては、議会でも何かと話題に出ている部分もありますし、そういった部分を更に私たちがもっともっと、一方的な話ではなく、全体を通しながら関わっていかなければならない、対応していかなければならないものだという風に思っております。

どうぞ忌憚のないところをお話しいただきながら、今日の会議を進めさせていただきたいと思っております。

いずれにいたしましても、教育現場での、教育という言葉でだけで、締めくくりをつけられないような、そういう状況もあるのかと、家庭の教育、学校の教育と別れていたような部分があると思うので、正に学校現場で、家庭のことまでというのは語弊があるかと思いますが、そういった部分まで組み入れながら、現場ではやっていかなければならないという、こういう新たな部分があるのかなというふうに思っています。

本日、忌憚のないご意見をいただきながら進めさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

（千葉教育次長）

続きまして協議に入りますが、ここからの進行につきましては、岩淵教育長にお願いいたします。

（岩淵教育長）

それでは進めさせていただきます。

総合教育会議は、町長と教育委員会が協議をする場、町長が開催を決定して、招集して進めるということになっています。教育委員会が補助執行という立場で、事務局を担当す

る形になっておりますので、町長の方から進めるようにとのお話ですので、私の方で今日の会議は進めさせていただきます。

総合教育会議は、学校教育のみならず社会教育まで含めて、平泉町の教育全般にわたって、様々な面について論議をし、これから先に向けて取り組みをとという風なことで考える場でございます。

今日は、29年度第1回の総合教育会議でも取り上げましたが、就学前の子どもたちの教育という風なことについて、もう一度やってみようということで決めたものであります。

6月の議会でも議員さんの方からご質問あったわけですが、現代、例えば、大人の40、50になった方の引きこもりのことが大きな問題となっているという風なことで、遡れば、中学生とか、小学生とかそういったようなところでの、不登校、登校渋り、あるいはいじめの問題もある訳であります。そういったようなところまで遡っていくと、やはり、子どもたちの、小さいころからの教育という風なことについてどうあればいいかということを変更して考える必要があるのではないかと、その様な考え方で就学前からの教育という風なことで、視点をそこに定めて話し合っていたらこうという風に思っているところであります。

今日の進め方ではありますが、2枚目の協議題、協議項目にございますように、テーマを就学前からの教育について、協議項目は3つに分けておりますが、子どもの育ちの現状、各部署、これは保育所、幼稚園、そして学校という風なことになりますけれども、その他、関わる町民福祉課、保健センター、適応相談員の方々に、今日はおいでいただいて、色々ご報告をいただくという風になりますが、その様なかたちでの取り組み状況、そして最終的には、就学前からの教育の取り組みということで、この場で、たくさんの方をこれをしていくということはなかなか難しいとは思いますが、今、全体として取り組んでいかなければならない、あるいは取り組んだ方がいいという風なことが、1つでも、どんな些細なことでもあれば、そういったことがここで話し合われて、そしてまた、前に進むという風なかたちであればいいなと思っております。

協議ですが、まず、委員さんたちから現在の就学前からの教育について思ってもらって、簡単にいいですので、まず、お話をいただいて、その後、子どもの育ちの現状と各部署等の取り組み状況について、おいでいただいている保育所、幼稚園、学校、そういった方々から話題提供という形で出していただいて、その後に関係機関ということで、おいでいただいている町民福祉課、保健センター、適応相談員の方からのお話を出していただいて、現状という風なことで、そして課題的なこと、どのような支援をなさっていただいているかというようなことを含めてお話をいただいて、論議を進めていきたいと思っております。最終的には、就学前からの教育として、繰り返しになりますけれども、平泉町として出来ること、今しなければならぬことといったようなことについて、話し合いが進めばいいかなという風に思っております。2時間という限られた時間でありまして、どこまで話が深まるか、あるいは、宿題というかたちで残される部分もあるかと思っておりますけれども、多くのお話をお聞きしながら、お互い意見交換をしていければいいかなと思っております。

そのようなかたちで進めさせていただきますが、よろしいでしょうか。

それでは、さっそくですけれども、まず教育委員さん方から、今感じてられることで結構ですので、お話を頂ければと思います。

では、本澤委員さんからお願いします。

(本澤委員)

今、教育長さんからお話にもありました、今回のテーマは、平成29年11月21日、2年にはならないですが、2年弱といいますか、前に一度は、テーマに掲げて町長さんともその時にいろいろ議論し合ったテーマで、一番、内容的なことではなくて、一番気になるのは、その時にいろいろ町長さんからも子育ての、親への子育てをする技の、例えば、1歳までにはこういうことをできる子供に育ててなきゃいけない。2歳まではこう、3歳まではこう、4歳はこう、あとは、幼稚園に入るまでにはどうなってなきゃいけない、それから、小学校に入るまでには、こういう力が必要ですよという段階ごとの子育ての方法と云いますか技といいますか、そういうのを議論し合ったのですが、それで町長さんが、さっそく、町の、平泉町としてのそういう子育ての平泉版みたいのを作っていこうというお話があったんですが、それで2年弱経ってますので、その後どうなったかということが一番知りたいですし、それがまだ実際には、私たちには、その後わからないので、そういうところを教えていただきたいのと、やっぱり一番気になっているのは、今の家庭生活というか、子ども達を取り囲む生活が、以前の母親や父親のそばに子育てをする先輩、いろんな細かいところまで教えてくれたり、サポートをしてくれる家族がなかなか身近にいない、みんな核家族、その親御さんだけで、どうしていく手だてがわからない、そのところを埋めるのは、今の時代だったらどうなのか、そのおじいちゃん、おばあちゃんともう一回一緒に暮らせとかそういうことはなかなか不可能なようですので、そこが一番気になっています。それを受け持つのは、やっぱり、一番軸になってリードして進めていかなければいけないのは、行政だと思います。後は、いろいろ地域でそういうグループ、サポートグループが育っていったり、そういうことになっていくと地域が受け持つっていくことも一つの方法だと思います。例えば、今、お年寄り方が、生き生き頑張れるという一つの方法で、各地区で100歳体操がすごく浸透してきて、活発にみなさん、うちの6区は毎週木曜日ですが、木曜日になるとみんな集会所に集まって、一生懸命やっているのですが、その幼児版といいますか、子育て版みたいが育っていったらいいのではないかなと、最近感じています。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。それでは、三澤委員お願いします。

(三澤委員)

限られた時間で、なかなか大変だと思うので、実は私まとめてきたので、ほとんど棒読みみたいな格好になるのですが、出来るだけ説得力あるような形で話したいと思います。

子どもの教育やしつけは、幼稚園や保育所でするものと考えていたり、入園、入所が当然の権利と思っている親の方々が、昨今多くなりつつあると聞いてます。幼稚園、保育園の職員は、職務上の範疇を超えて、仮に手をかけてやるにしても、当然、限界があることはわかってもらう必要があると思います。親たちには、あるいは親には。ましては、若い職員方々は、これは失礼な言い方になるかもしれませんが、誤解しないでください。

若い職員の方々については、一人の職員、社会人としても人生経験からいって、すべてに臨機応変に物事を判断し、さらには賢明な行動を取ることで期待することは、出来ないと思います。でも親にとっても気軽に子育て上の問題や悩みを相談したり、わからない

ことを身近に聞いたりできないまま、不安をため込んで、子ども優先で、いいからいいからと、子どもの言うことを聞く一方で、育てていって、以後の成長過程でも問題を起こしてしまうケースも多いと聞いております。今では、家庭も地域も社会構造の変化や、行き過ぎの感じさえするプライバシーの保護、すべてに変化をきたしてしまっている、かつての隣近所付き合いを中心とした教育力がほとんど消滅してしまっていることは、これまでも、いろんな場所で、いろんな機会で話されてきたことです。でもこのような時であるからこそ、これからを見据えれば、子どもたちの後ろ盾になるような地域のつながりをしっかりさせたいと、子どもを守り育てるといった教育力の、かつて持っていた教育力の復活が大事になってくると思います。これについては、やっぱりあきらめずに少しずついいから、こだわりを持って取り組むべきことだと思います。そうとはいっても、すっかり地域の連帯が希薄になってしまった、意識の醸成ができていない中で、これをいきなり実践させるといっても無理に近いので、関係部署と社会教育との連携事業で、まずは子育てサークルの育成を進めていく。きっかけづくりの初期段階は、人数規模は全く関係せず、度外視した形の、本当に仲良しグループ、親睦を通じたものでいいので、でものちのち活動の起爆剤となるようなグループ作りから取り組んで、段階を見計らって長く経験を積んだ、タイミングを見計らってといいますか、長く経験を積んだベテラン保育士さんや、幼児教育の経験者を支援者として、活動を軌道に乗せていくような就学前の支援、親支援はどうでしょうか。各まちにファミリーサポートセンターや子育て支援センターなどがありますが、やはりそういったところは、通り一遍のことまでしかできないと思います。仮に自治体主導の就学前支援は、教育、福祉、保健担当部門が、縦割り抜きで進めるべきだと思います。実は前にもこのことは言いましたが、もうこれから必要になってくるのは、しかも、非常に子どもが少なくなってくる。となると、やはり、ひとつの機構改革も考えていくべき時期だと思います。ですから、子育てに関する一元化、窓口の一元化、そういったものがやはりこれから欲しくなってくると思います。全国各地でも遅きにせよと言いつつ、やっているとあります。ですから、手遅れにならないように、十分そこは配慮していった方がいいと思います。なお、少人数規模でも子育てサークルの活動が、だんだん軌道に乗って、活発化していく段階で、保育園、幼稚園等々の担当課だけでは、気が付かなかった行政需要や課題が見えてきたり、聞こえてきたりと思うので、地域から子育てグループの誕生、発展は非常にこれからの子育てについては、もう、しつても教育も非常に効果的だと思います。先月だと思いますが、役場が募集をかけた協働のまちづくりサポーター募集がありましたけれども、このようなものこそ、実は、少し大げさになるかもしれませんが、子育て支援、親支援というものを絞って、今後一番大事なことになるのではないかと思います。

(岩淵教育長)

三澤委員のお話でもうすでに、3の部分に入ったかなという感じがしますが、また、もう一回最終的には、そこに入っていきますので、今感じられていることということで、次、山平委員お願いします。

(山平委員)

子育てというところにつきますと、昔に比べると格段に恵まれた状況で、今現在が進んでいると思いますが、一方では、核家族化が進んで、本澤委員が言うとおりの、おじいちゃ

んおばあちゃんに育てられないという状況が見受けられます。それも昔に比べれば厳しさというものが段々なくなってきたので、そこに親の甘えが生じているのかなと思っています。それに伴って、いろんな障害であったり、いろんなことが発生しているのではないかなと考えられますが、子ども自体も少なくなってきた現在のなかで、子育ての考え方であったり、方法とか、三澤委員が言ったとおり子育てサークルの育成などといったものの、いろんな方法論があると思いますので、現代に合った進め方というのを検討していかなければいけないと思っております。一番心配しているのは、家庭の教育能力の低下というところだと思います。今後ゆとり世代の方々の方が親になってくると、益々そういったものが拍車をかけてくるのではないかなと心配しているところです。いろいろな活動していると、年代によって親の考え方がまったく違うんです。次の年についてもそうなんです、まったく年によって、集団の、親の考え方が変わってきていると見受けられますので、そういったところも心配の要素ではあるなと思っております。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。次に三浦委員さんお願いします。

(三浦委員)

3人の委員の皆さんからお話が出たわけですが、まず子どもたちは集団生活の中で、様々な問題、課題を抱えて、その中でそれを乗り越えながら頑張っている生活をしています。その保育所なり幼稚園なり小学校なり中学校なり、平泉は中学校までですが、施設の中、学校の中では、先生方や保育士さんや周りのサポート方々、支援員さん等の力で何とか課題を自分なりに乗り越えて成長してきています。ただ、問題なのは、その課題を乗り越える時に、やはりなかなか乗り越えられないで不登校になり、引きこもりになっていくというかたちが、この頃大変増えています。その場合に、やはり問題になるのは、学校に入る前、幼稚園に入る前、保育所に入る前の、就学前の子どもたちの家庭状況が、どうなんだろうかというのが、やはり一番心配な点です。平泉保育所の中に子育て支援センターがありますので、その中に心配なご家庭は相談に行っているかどうかというの、少し気になります。自分の方からなかなか出かけていくというのは、この頃少なくて、心配だなと思うところには、やはりこちらから出かけていかなければならないわけですが、その場合、子育て支援センターには、専属の相談電話の窓口として、何か電話対応する方が、平泉町の場合はいらっしやらないという風にお聞きしているのですが、保育士さんと兼用という風にも聞いていますが、そういう方が必要なのではないかと、それから出かけていく、あの家庭がちょっと心配だなと思うところには、こちらの方から出かけていくための組織、専門家の方何人か、心理士さんや保育士さんとかが何人かでチームを組んで、出かけていくような組織が平泉町ではあるのだろうか。様々な窓口、保健センターさんにもいろいろな学級がありますので、お母さん方、心配なところは相談に来るとは思いますが、平泉町のどこに、一本化されてないような、いろんなところでいろいろやってるんだけど、本当に心配な時は、どこに連絡を取ったらいいのかということが、やはり気がかりなところです。保健センターなのかなと思ったりしますが、本当に何か家庭の中で、子育てで心配な時、ここにありますよと提示して、支援センターある訳ですが、十分に活用されているのだろうかという気がかりなところはあります。

(岩淵教育長)

4人の委員さんからそれぞれの思いといいますか、考え方が、話出ました。これから、各園、各校の方々からお話をいただきますけれども、即それに回答ということではなくて、まず現状が、子どもたちの様子がどういう様子であるか、それに対してそれぞれ、どのような形で、例えば、親への働きかけもあるかと思えますし、子どもの姿に映し出される親の姿というのもあると思えます。そういったことを含めてお話を頂ければありがたいと思えます。それでは、平保平幼の園長先生の方からお話をいただきたいと思えます。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

先に、幼稚園、保育所の方の話をさせていただきます。

平泉幼稚園、保育所では教育目標に基づいて、教育委員会に出されています「平泉学」をベースに家庭、それから地域との連携を図りながら、あとは幼保小との連携活動も含め、先を見通した姿を目標として教育活動を行っております。

子どもの様子ですけれども、これまでの子どもたちの姿から、知・徳・体のバランスの取れた子どもたちということで保育は行っているのですが、特にも体、運動の部分について育ちがあまり見られないかなということから、昨年度からより意欲的に遊びに取り組む子どもたちというところを強化したいなということで、60運動を中心に取り組んでいるところです。

その成果から子どもたち、それから保護者、そして教師の意識の変化、あるいは環境構成等にも力が入るなど変化がすごく見られておまして、少しずつではありますけれども子どもたちも成長していますし、保護者の姿も教師の姿も成長しているという風に捉えておりました。

ただ、その中で今の課題として挙げられることが、子どもたちの家庭環境、もちろん生活の中で遊びが、昔はテレビ、あるいはDVDとか見過ぎで、それに子守りをさせることによって一方通行の生活が多いのかなということを取り上げられたことがあるのですが、それが現在においても、今度は、やはりそれにプラスしたゲームが加わって、一方通行の生活が本当に主になっているのかなと。その園での生活の中で、先生方が話をしたことに対しての返事がない、どうしてなのかなと考えた時に、やはりそれはテレビだったり、DVDだったり、ゲームだったり、結局、向こうからは来るのですが、自分はそれに対して返事をする必要性がない。それが、もしかすると今も大きく影響しているのかなという風を感じてはおります。それから、ゲームの場合ですと、クリアできなかつたりすると怒る、感情が処理できない、というようなところも、もしかするとこれからの子どもたちの人格形成というところでは大きな影響を与えているのではないかなということも考えられるのかなという風に思っています。

今後その辺を含み、家庭への指導と言いますか、話し合いの場を設けてお伝えしていただかなければならないのかなというのが現状の姿であります。

それから、親離れをしない子どもたちもですが、逆に子離れをしないお母さん方もいらっしゃるかなと。例を挙げますと、先日、水かけ神輿の時に保護者の方が子どもたちを連れてきて、本来であれば先生にお願いしますと言って自分は離れるのですが、すぐ側にいて、暑いだろうということで、仰いであげたりとか、とにかくなかなかお子さんの側から離れなくて、こういうところなんだろうなという風なところもちょっと指導していかなければならないところなのかなという風に一つ思っています。

それと、良いところもあるのですが、実は運動プログラムに取り組み始めたことによって、親の目標が具体化したために、一生懸命になっている保護者の方も中にはいらっしゃいます。やはり、具体的な目標というものを掲げてあげるのが、もしかすると今は必要なのかなという風にも一つ感じています。

それから、先ほど三浦委員さんからの子育て支援センターの件で質問がありましたけれども、子育て支援センターに1件、実は過去に相談をされた事例がありました。その際につきましては、保健センターあるいは福祉課とすぐに連携しまして、家庭訪問を行ったり、あとは子育て支援センターの方で、こういう活動があるので来てみませんかということで、お母さんからの相談だったのですが、旦那さんと一緒に来ていただいて、何回か過ごしたということもありましたし、その後、保育所の方に入所していただいて、今は経過を観ているという風な事例もございます。

ただ、三浦委員さんがそのように感じられたということは、もしかすると地域の方には理解されていない部分があるのかなというところが、もしかすると今後の課題になるのかなという風にちょっと感じたところです。

(岩淵教育長)

すべて発表、報告いただいてからいかないと前の人の記憶が薄れますので、今ここで平幼保さんからの話があったことについて、この点を聴いてみたいとか、質問でもご意見でも構いませんのであればお願いします。

(三浦委員)

園長先生の返事がない、感情が処理できない、というのはすごく大きな問題だと思えます。今は、ご家庭の方に、その状況をお話する、担任の先生がこういう状況ですと、それは、ご家庭の受け止め方としては、そうですかという感じで受け止められていらっしゃるでしょうか。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

様々です。

(三浦委員)

様々ですよ。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

感じるところは、様々なので。

(三浦委員)

それで、その場合に、とてもお話をしづらいということはないですか。

なかなか、例えば、私は中学校の経験しかないですが、ご家庭には、いやこのような状況では駄目だと思いますので、ご家庭でこのようにしていただだけませんかというようなお話をした場合に、昔ですと「申し訳ございません」とか「心がけます」という話があったのですが、なかなか今は自分が否定されているという風に受け止められる方も多くて、「いや、そうではなくて」とお話をしてもなかなか、そして、こじれるということがとても多いです。

だから、多分とても言いづらいのではないかなという感じはもつのですが、その場合にどこかで助けてほしいということはないですか。

幼稚園、保育所ではご家庭に何か働きかける時に、何かもっと専門的な方から一緒に行っていたら、そしてご家庭への働きかけ、相手が納得できるようなかたちでしていければということはないですか。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

まず、気になるお子さんがいた場合、園の方からアプローチをもちろんするのですが、あとは保健センターさんだったり、教育委員会の方で特別支援のコーディネーターさんだったりとか、いろいろな機会があるものですからどうにもこうにもという時にはそういった関係機関をおすすめしたりするようにはしています。

でも、中にはなかなかご理解をいただけなかったりする場合もあるので、繰り返し担任の先生がお子さんの様子を伝えながら、やはり参観日だったり、いろんな行事に保護者の方がいらっしゃるので、ここを観てくれると有難いなというようなところを気づかせるような声かけをしながら進めています。

(三浦委員)

ご家庭によっては、外部から入って来られて、いろいろ言われるのも嫌だというお家もあるから、よく知っている方の方が話しやすい、話を聴きやすいというのはあると思いますけどね。家庭への働きかけが一番やはり難しいなという風には思います。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。そのほかに、ございませんか。

(山平委員)

運動プログラムの取り組みについてですが、具体的な目標を掲げることで、親も変わってきているということなのではすけれども、この目標は親も一緒に考えたのですか。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

はい、そうです。どうにもこうにも外で元気な遊ぶ姿とか、なかなか中での活動が多くなってしまっていて、子どもたちは何か遊びが活発じゃないなというだけではなくて、自分たちで工夫して何かをする姿がすごく減ってきている。意欲的な、と言いますか、物事に対する取り組みの姿勢というのが、ちょっと欠けているのではないかと、私自身の中で心配になってきまして、これは遊び込む、自分たちの力で遊び込むというのがかけているからなのかなということで、まず元気に遊ばせよう、その遊びの中で、気づいたことを友達と何か展開していけば主体性だったり、意欲的な姿になったりするのかなということで、60運動ということで、専門的なところから意見をいただいて取り組んだのですが、実はその中で体力測定というのがありまして、それが全国より低かった。全国より低かったという結果を踏まえて、親御さんがすごくショックを受けられた。これではいけないということで、家庭でも散歩を始めましたとか、外で遊ぶようになりましてとか、そういった変化がありました。

やはり、ばほっとしたものではなくて、文字だけ並べるのではなくて具体的に本当に数字でとか、何かはっきりしたものとするとすごくいいんだなということを実感していました。

(山平委員)

もう一点、先ほど三浦先生からも出ましたが、返事がないという子どもに対して、先日、小学校の話ですが、長島小学校はそんなことないよなと思いながら、先日、スポ少バレー

の練習試合の時に、花泉の永井だったのですが、やはり子どもたちの返事がないということで、コーチが嘆いていました。ですから、もうそろそろ小学校の方にも上がってきているんだなとちょっと心配しています。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

極端に返事がないです。

(山平委員)

極端に、長島の方は、返事よりプラスαが多いので、賑やかでいいのですけど。

(岩渕教育長)

よろしいですか。それでは、続いて長島保育所の所長さんから、状況報告をお願いしたいと思います。

(千葉長島保育所長)

子どもたちの様子と子育ての支援ということでお話をさせていただきたいと思います。

みなさんご存じのとおり保育所は、保育を必要とする子どもの保育を行うところとして、その場所は生活する上で、最もふさわしくなければいけないということなので、私たちもそれを心がけているところです。

養護と教育を一体とするということもあります。子どもを一人の人間として、尊重しながら乳幼児期にふさわしい経験が積み重ねられるように丁寧に援助することを心がけているところです。

まず、安心して預けられる保育所であるということです。様々な行事を保育所では全体の計画や年齢ごとの計画、年度当初につくりましますので、それに添って遠足とか幼年消防の鼓隊演奏、運動会、発表会などさまざまな行事を行っています。

子どもたちにそういったことを経験させることで、できることが増えて、集団で、みんなで目標に向かってやるということが自主性や協調性を育てていることにつながっております。

年齢に合わせた保育を行って基本的な習慣がつけられるように、あとはさまざまな遊びの中で、全身を使って活動することで、体を動かす楽しさとか、基本的な動きを身に付けられるということを比較的長島保育所園庭が広いので、天気の良い日は外で遊ぶ機会をつくって、遊具の使い方、ルールも教えながらやっているところです。

園庭には、木や花がいっぱいあるものですから、そういったことでは葉っぱを取ってきいたり、桜が咲けば桜の花を見たりとか、虫がとっても好きな子どもたちですので、虫探しにすごく興味があって外に出ると、特に男の子は、虫を探したりしています。

それで、図鑑を観て、これどんなのと調べたりして、「先生こういう虫いるの知ってる」と聞かれて、先生知らないよと言って、子どもたちに教えられるところもあります。

保育所は、0歳児から就学前の子どもたちを預かっているものから、大きくなった年中や年長になってから何かやり始めるのではなくて、未満児から少しずつ積み重ねていったところが年長児になるというところを理解しながらやっているところです。

事例として、長島保育所の幼年消防クラブというものがありますけれども、こちらは3歳児から年長児からの3クラスが団員として入っているのですが、3歳児の時に年中さんのやっているポンポンのダンスを観たり、年長さんがやっている鼓隊の演奏を観ることで、いずれ自分たちもそういったことができるんだという憧れを持ってもらう。そして、年長

児になった時は、鼓隊の演奏が難しいと思ってもやりきる。最後は、やりきって発表できるというところを子どもたちが喜びとしてできたというところを自信ができるようにというところ、そういうところを年長児だけでなく、小さい時から見せることによってできるようになってきたと感じています。

鼓隊の時にも難しくてなかなか担任の思うようには動かなかった子どもたちに、「じゃあ辞める」と言うと、やると。自分たちは、やりますという感じで最後は満足いかなかったかもしれないですが、ある程度はかたちになって発表ができたと思っています。

自分でできることや頑張れる子どもになってほしいということで、愛情をもって保育するように努力しているところです。

子育て支援についてです。親の支援ですが、保護者に対する子育て支援ですが、これは保護者が親子関係を築いていけるように保護者の養育力の向上につながるようにということで、支援を行っているところですが毎日の朝夕の送迎の時にできるだけお話をしたいということをやっています。

ただ、中にはなかなか相談したい、お話をしたい方に限って忙しかったりして、時間が取れないというところもあります。ただ、少しずつ長い時間、長い期間、長島保育所にいますので、少しずつ安心して話をしていってもらえるような関係性をつくってあげたいのかなと思います。

先ほど、三澤委員さんからお話がありました若い保育士さんの関係の話ですが、保育していく上でこれは保護者へ伝えた方がいいなという事例があった場合には、若い担任ではどうしても判断することが難しい。どういう風に接していいか難しいところは、私と所長補佐に相談していただいて、交えながら話して誰が伝えたら一番いいかというところを含めて、どう伝えたらいいかというところを判断しているところです。

保護者によって、家庭環境を話す前にいろいろ調査をするわけなのですが、難しい。保健センターで訪問に行っている家庭とかですと、今の状態どうですかというところを聞いてみたり、福祉課に行っても何かこういう風に話しても大丈夫かしらねと言いながら保護者さんとは接して、うまく関係性が築けるように、そして子育てに対しての支援になるようにというところをやっているところです。

最近、お迎えが連絡もなく8時近くになる家庭があったものですから、保健センターさんに言って家庭の状況を聞いてみて、最初、私が話すことになっていたのですが時間帯がうまく合わなくて所長補佐がその時はお伝えして、その後は早く来ていただける。連絡がないというのがちょっと困った、大変だということで、即対応するようにはしたところ

です。

あとは、母親が育てることが大丈夫かなと思う母親の方もいます。そういった方についても丁寧に相談にのることを心がけているところです。

あとは、一回こう言ったんだけどまた戻ってしまったというケースの場合は、繰り返しお母さんにお伝えしていく。何でもかんでも保育所でやってしまうと、それこそ任せっぱなしになるので、そこはきちんとお家でやるべきところは、こういうところはやった方がいいですよというところを丁寧にお伝えしていくというところをやっています。

行事のあるごとに子どもたちに言っていることは、生活リズム、就寝時間を守りましょうということになります。早く、さまざまな行事の時に早寝早起きをするということ子ども

たちに伝えて9時には寝ましょう。そして、早く起きて朝ごはんを食べて行事に臨みましょうねということをお話しています。ただ、これは子どもたちだけに言っても仕方のないところなので、参観日などに保護者さんにも9時には寝ましょう。でもその前に、ご飯を食べないといけないので、そこはお家の方が意識してほしいというところを伝えたりしているところです。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。今の長島保育所さんのお話について、何かご質問あれば伺いたいと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。それでは、時間も気になってきましたので進めます。

今日は、小学校代表ということで、長島小学校の校長先生にお出でいただいておりますので、小学校の様子、子どもの様子、親の様子についてお話いただきたいと思います。

(高橋長島小学校長)

はい。就学前の教育について関わらなくてもいいですか。

(岩淵教育長)

はい。

(高橋長島小学校長)

就学前からの教育というのがテーマのようなので、毎年入学してくる1年生を観ていると、何人か登校時に母子分離不安のような行動を示す子どもがいます。学校まで送られてくるのですが、玄関前になって親から離れられない。大抵は、入れてしまえばケロッとしているのですが、その時に感じるのは、母親も同様です。子どもが心配で駐車場から離れられない。「仕事に行かなくていいのですか」という感じです。そういうのが。

それで、今いろんな話を聴いていてやっぱり、保護者教育、保護者支援なんだろうなという風に思っています。それで、教育はその子に目をかける、手をかける、声をかけることだと思うのですが、それがどこでどれだけかという加減が大事なんだろうなと思っています。

それで、家庭で保護者に期待することは、子どもの話を聴いてあげることです。それで、就学前の親にお話をする機会というのは、本校では3回ぐらいあって就学時知能検査が11月にあるのですが、家庭教育学級を開いています。それから、2月には1日入学があるので、そこで校長講話などがあるので、それから、あとは、子ども自体はさらに運動会の時に保育所の就学前の子どもたちをレースに呼んで幼児レースに参加してもらって、あとはふれあいコンサートには長保の鼓隊がゲストとして参加しています。

ですから、子どもたちを見る機会もいっぱいありますし、お母さんたちに話をするのは2回ぐらいありますし、本校の児童として入学してから保護者にはPTA総会や学校経営説明会、それから地区懇談会などで、お話をする機会があります。

その時に、子どもの話を聴くということで、いつも言っているのは、「の」を大切にしてくださいねと言っています。「の」子どもが「今日、アサガオが3つ花咲いたんだよ。」と言った時、お母さんが「そう。良かったね。」で終わらないで、ただ、子どもの言葉を繰り返すだけでいいので、「アサガオの花が3つ咲いたの。」と、「の」をつけると、「でもね、お昼にはしぼんでたんだよ。」と、「え、お昼にはしぼんでしまったの。」と、「の」を付けるだけで、話が進んでいくんだそうです。ですから、「のに」が付くと愚痴になるのですけ

ど「の」を付けるとすごくいいんだそうです。話が進んでいくそうです。そこで、子どもの言葉をさえぎって「でも」とか「違うんじゃないの」とか「ふーん」とか話を切ってしまうような。忙しいのは分かるのですが、そうではなくてお話を聴いてほしいなということをお伝えしています。

家庭教育で、一番は自尊感情を育てることだと思います。信頼をおける大人に褒められる。自分の行動や成果等を喜んでもらえる。そういう経験が自尊感情を育てるそうです。

ですから、職員にも喜びを共有する学びをしていきましょうねとお話をしています。ですから、一番は、子どもとどこで、どれだけ目をかけて手をかけいくのかさじ加減かなと思っています。だから、地区懇談会などで、いつも聞くのはお風呂に一緒に入っていますかとか、一緒に今でも子どもを寝付かせていますかとか、仕上げ磨きをしていますかとか、ということを聞きます。そういうことをしている家庭は、「うん、なるほどな」と、子どもの表情が浮かんできます。ですから、我々がどれだけできるか分からないですが、保護者と話をしながら、保護者にできるだけ子どもといっぱい言葉を交わして、関わりを持ってもらうことを働きかけています。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。長島小学校長先生からお話がありましたが、保育所、幼稚園から小学校へ上がってくる子どもたちの様子からもお話がありました。何かもう少し聞いてみたいというご質問等ありましたらいかがでしょうか。

(三浦委員)

昔だと、登校渋りのようなものの大きな原因は母子分離不安が大きいと言われていたのだけど、今は生活習慣の乱れもあるし、勉強、たぶん夏休みの宿題とかやってないとかというので来なくなったり、しばらくずっと不登校の傾向があったりするのですけれども、宿題をやって来ないのは生活習慣の乱れから生まれてくるから、登校渋りのその原因っていうのは私の捉えとしては、大きな母子分離不安と生活習慣の乱れかなと今思うのですがほかにも何かあるのかな。もしあれば何なのかなと思っています。

(高橋長島小学校長)

保健室に来る子どもが多くて、低体温です。低体温の子どもが結構います。

(三浦委員)

低体温。

(高橋長島小学校長)

低体温の子どもが多いです。そういうのって、もしかしたら生活習慣の乱れのようなのかな。昼夜逆転とまではいきませんが、朝は早く起こされるのだけれども、夜がなかなか寝なかったりして、体温が低くて、自律性障害まではいかなくてもそれに近いようなものをおこしている子どもがいるかもしれません。

熱を測るとやたら低い人がいる。熱があるのではないかと思うわけじゃないですか。保健室に来るので。でも、熱を測ると逆にやたらと低くて、朝 35 度何分しかないという低体温の子どもがいます。

(三浦委員)

どちらにしても生活習慣の乱れも、その親子関係についても、やっぱりその子が問題なのではなくて、家庭でちゃんと生活習慣をきちんと小さい時から徹底してれば、ある程度

子どもはその生き抜いていく力を自分の力もあるので、そこは周りの家庭の援助というか教育はすごくやっぱり大事だなと思います。その徹底が今はなかなか難しいですね。親御さんの勤務体系も全く昔とは違うし、家庭の中の考え方もおじいちゃん、おばあちゃんと、若いお父さん、お母さんでは全く違ってきているから統一して子どもにあたるというのはないから子どもがすごく気持ちが不安定になりますよね。

(岩淵教育長)

はい。ありがとうございます。各園、学校等の報告をいただきましたが、ここまでで1時間経ってしまいました。残り1時間でどうしようかという風に思ったのですが進めません。

それでは、そうしたような子どもを実際に活動している、学んでいる場からちょっと話を変えて、関係部署の取り組みということで、町民福祉課、保健センターの課長さん、所長さん、それから、適応支援相談員として学校に入っているひとみさんに来ていただいています。その面からどのような取り組みがされているか、そして取り組む中でさまざまな課題とされていることについて、若干触れていただければありがたいと思います。それでは、高橋所長さんお願いいたします。

(高橋保健センター所長)

それでは、私の方から平泉町の子育てのサポート一覧ということで、29年度の時に出版していたものですが、その後、変わった、新たに追加した事項とかそういうものの説明をさせていただきますと思います。

まず、左の方で、妊娠期については不妊治療ということで、一般と特定とあるのですが、子ども特定については、体外受精を含めたかたちで一般はそのほかのかたちでの不妊治療になります。そういう方の助成も行っています。

それから、妊娠期につきましては、今、新たに妊婦相談、妊婦訪問ということで、特に不安がある家庭には希望された方を対象にしていますが、そういう方を対象に訪問したり、お話を伺ったりして、不安解消に努めております。

それから、0から1の真ん中辺りで産婦健康診査、新生児聴覚検査ということで、産婦健康診断については、生後約1週間と1カ月の頃に健康診査費用の一部を助成しておりますし、新生児聴覚検査事業については、生後3日頃聴覚障害検査の費用を助成する事業を始めております。

それから、各種予防接種、真ん中の大きくなっているところがあると思いますが、予防接種情報提供システム、子育て支援ナビというものを始めています。これは、携帯電話やパソコンで予防接種のスケジュールや子育て情報、支援情報などのメールとか閲覧できるような情報として挙げながら、できるだけ予防接種の事故や子育ての情報を得ながら不安解消に努めていただきたいと思いますということではじめております。

それから、真ん中の次の下の方のファミリーサポートセンターということで、ここは町民福祉課の事業になりますが、子どもの預かりとか子育ての手助けをしたい方と、手助けをしてほしい方のお手伝いをしたいという方を結んで、例えば、保育所の送迎や子どもの預かりを行う事業ということで、こういうことも始めております。

それから、おひさま教室の拡充ということで、今までは、支援が必要なこどもが増加しておりますして2クラス程度だったのが、去年から3クラスに増やしております。そういう

ことで、おひさま教室の拡充をして支援などの親御さん、子どもの支援にあたっています。このような状況があります。

あとこのほかに、産後ケア事業といたしまして、退院後の母子に対するケアや育児のサポートのために、これも病院とかご本人とのお話の中で特に支援が必要だという方を対象に専門家を町と契約しまして派遣する事業を行っています。昨年度は、3人の方に各ご家庭を訪問していただいたりしながら産後ケアの事業を行っていた経緯があります。

これも、これには載っていませんが発達支援検討会ということで、幼児健診後の児童の様子を保育所、幼稚園と確認、情報共有して今後の新対策を検討するという事業を交えながら今後の支援対策を考えていく事業も行っております。

それから、ペアレントプログラムということで、子どもの行動に焦点を合わせる。子どもに焦点をあてて子どもとの良い関係づくりを学べる講座を行っておりまして、なかなか親御さんで子どもとどう接したらいいか分からないという方も増えております。

それで、その参加者の増加もありまして、実施回数も増やしたりしながら、ペアレントプログラムというものを実施して、できるだけ親御さんの子育てへの不安を解消するようなこともやっております。

それから、先ほどいろいろお話がありました子育て支援の窓口の一本化、やはり国でも平成32年を目途に全国でそういう窓口を設置してほしい、設置しなければならない、そういう風な取り組みを行ってまして、まちでもどのようにしていいか、今年検討する準備態勢に入っております。

ほかでは、例えば一関市では子育て支援館みたいなかたちで、大きいところは確かに施設をつくってみんなで一緒に入ってしまったって、関係課が、支援体制を一本化することが可能なのですが、なかなか町では保育所、例えばアピュイとかそういうところも支援を行っている状況であるので、今の状況として考えているのは、保健センターが窓口となりながらもそこら辺の情報交換、情報共有を各課担当する団体等と集まっていただいて、いろんな情報を交換しながらどのように支援していったらいいのかという体制で進めてはどうかと考えていました。ただ、その場合、なかなかそれなりの人がほしいとか、職員がほしいとか、専門的に相談支援を受ける方がいるのかとか、その辺の課題もあって、今後その辺もどうクリアしていけるかそこら辺の検討が必要だなと考えております。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。

今、たくさんの方のいろいろな取り組みについて報告いただきましたけれども何かお聞きしたいことありますか。

(本澤委員)

いろいろな事業の概要がこれで良くつかめたのですが、これを各、例えば初めて親になるご夫婦とか、各一軒一軒に周知する方法、いつでもこういう相談に行ったらいいのか、具体的な何か冊子、手引書みたいなものが配付されているのでしょうか。

(高橋保健センター所長)

妊娠されまして、母子手帳の交付が保健センターになっておりますので、その時にはこういうことで、保健センターではもちろんいろんな相談を受けております。もちろん相談してくださいとは言っています。後は、その時期に、母子手帳と一緒にパンフレットを配

りながらそういう周知はしていますし、その後、いろんな検診があります。その都度、保護者の方からアンケートを取りながら、いろんな育児不安とかそういうものを情報収集しながら、こちらでいろんな情報提供したりしながら不安解消には努めています。

それから、子どもさんが生まれて必ず家庭訪問をしておりますし、その家庭の状況を把握しながらその方に合ったような対応をしている状況ですし、あと民生委員さんの方でも地域の方と一緒に家庭訪問をしながらその方の状況などを把握していく状況もありますので、いろんなかたちでサポートをやっているという状況はあります。

(本澤委員)

来たら教える。

(高橋保健センター所長)

そうですね。

(本澤委員)

郵送とか、今度こういう講座がありますよ。是非、ご夫婦できてくださいとかそういうことを知らせる、そういうのはこちらからは送ったりは、そういうのはしていないですか。

(高橋保健センター所長)

検診とかそういう時を利用して、こういうのがありますからと渡すこともあります。

(本澤委員)

とにかく来たいいろんな機会を利用して渡すようにですね。

(高橋保健センター所長)

検診に来ない方はもちろん連絡を取って、「次の検診はこの機会あるので来てください。」「講座があるので来てください。」というかたちで、来ない方にはそういうかたちで個別には対応しています。

(本澤委員)

分かりました。ありがとうございます。

(岩淵教育長)

そのほか、ございませんか。

(三浦委員)

就学前の母子関係に、検診の時にお母さんと子どもさんの様子を観てちょっと問題あるなど、まず気づく場合は、どういう風に対応するのですか。

(高橋保健センター所長)

基本的には、検診の時にチェックしてしまして、そういうのも記録に残していますし、あとアンケート調査、「今の状況どうですか」とか、不安があればそういうものを見ながらチェックをかけたりにながらやっていますけども、それに対しては、例えば1歳6ヶ月検診があれば、その後、経過を見ながら2歳6ヶ月ではどうだったか、3歳6ヶ月ではどうだったか。特に先ほど言ったように大きな問題があって、専門家が必要だとかねれば、また専門家を派遣しますが、それ以外はず、その状況を観ながら対応をしている状況です。

例えば、保育所や幼稚園だとちょっとといえ、今、おっしゃるように先生方がご家庭に連絡するということのだけれども、もっと以前にあれこの親子関係ちょっと問題出て来そうだなとやっぱり保健師さんなどが気づくことも多いと思います。入る前に。その場合も手

立てというのがすごく大事だと思うのです。何でも早めが大事なので、お母さん、こういう場合は、こう働きかけたらいいんじゃないですかというような事例とかはありますか。

(高橋保健センター所長)

それは、ケースによってですがいろいろあります。

(三浦委員)

ケースによって。

(高橋保健センター所長)

いずれ、各種健診の時の状況とかも個人ごとにファイルしてありますし、それから特に問題があれば家庭訪問したり専門家につないだりいろいろしています。

(三浦委員)

そうですか。はい。

(高橋保健センター所長)

そして、保育所、幼稚園との対応が必要なら町民福祉課と連携しております。

(岩淵教育長)

よろしいですか。そのほかに、ございませんか。

(千葉町民福祉課長)

だいたい同じような話はしていただきましたが、保健センターの所長さんからお話をさせていただいて、上段は保健センターが主で、下段の方が町民福祉課の方の対応をさせていただいております。

町の方では、子育て支援ということで、「子ども子育て支援事業計画」というのを平成27年から31年までの5年間分を事業計画として策定しております。その事業計画に基づきまして、国から3分の1と、県から3分の1の補助事業をいただきながら、その中でいくつかのメニューを作って事業計画を立てて、その計画に基づき行っているところでございます。まず一つ目につきましては、地域子育て支援拠点事業ということで、先ほどお話がありました。平泉町は子育て支援センター、平泉保育所内にありますがその事業運営をしていただいておりますし、あとアピユイでの子育て支援事業ということで、この事業を今やっているところでございます。

あとは、先ほどありました乳児の家庭の現行本事業ということで、児童民生委員さん、児童委員の方々に生後2カ月のお子さんを目途にその出生した赤ちゃんの訪問を全戸で実施していただいております。

あとは、養育支援事業ということで、養育支援が特に必要な家庭に対してそのお宅を訪問してその要求に対する指導、助言を行っているということでございます。

これは、年に1件か2件くらいはあるようです。

あとは、子育て短期支援事業ということで、これはショートステイです。これは、今はやっていません。

あとは、ファミリーサポートセンター、先ほど保健センターの所長が言いましたが、これを0歳から6年生までのお子さんを会員登録していただきまして、それぞれ支援をしたり、支援してもらおうというかたちで、今、平泉町ではなく一関の社会福祉協議会の方で会員を募っていただいております。平泉の方はあまりデータはないですけれども、利用者数は、あまり多くないということです。あとは、一時預かり事業ということで、これは幼

稚園と保育所にあります。それぞれ保育所については、一時的な、保育所に入っていない方でも家庭内でやっぱり一時預かりをしてほしいというお子さんがいた場合につきましては、時間帯ですけれども一時的に預かるということを行ってございます。

あとは、延長保育事業ということで、通常の利用時間以外の日に子どもを預けてもらいたいという家庭につきましては、この延長保育事業ということで、県からも予算をいただいているところでございます。

あとは、放課後児童クラブにつきましても平泉に2カ所の児童クラブがあるのですが、これにつきましても保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校に就学している児童に対しまして、授業終了後に小学校の余っている教室とかあるいは児童館を利用してそこで健全な適切な遊び、及び、生活の場を与えてその健全な育成を図る事業を行っているところでございます。

子育て支援事業を計画しましてやっておりますが、今年度31年度で終わりますので、改めまして、令和2年以降につきましては、また5年間の事業計画を令和2年から5年までの分ですが、これにつきましては、小学校さん、幼稚園さん、保育所さんをお願いいたしまして策定するために保護者の方々からアンケートをいただいております。そのアンケートを基にしまして、どういったかたちで子育て支援をするかということ今年度事業計画を策定し、令和2年度以降に新たな事業を行っていくということになってございます。

今、近々の課題といたしまして、保育所での待機児童の関係でございます。昨年度から、残念ながら平泉におきましても待機児童がでてきて、昨年度平成30年度は、9名の待機児童がありました。令和元年度につきましては、6月30日時点でございますが2名の待機児童がでております。これについて待機児童が何故出るか考えてみますと、子どもそのものは少なくなってきてはいるのですが、やはり家庭で両親核家族化になりまして、両親が共働きになるので、どうしても経済的にお金が必要だということで、子どもを預けて仕事をしたいという家庭が増えていまして、保育所に預けたい。子どもそのものは減っているのですけれども預けたいという保護者の方が増えていまして、ただ、その時にやっぱり保育所の方では、保育士が預かるくらいの人数がいないから待機児童が発生しているということが事実でございますので、その対応といたしましては職員採用というわけにはなかなかいかないものですから、正職員です。やはり、臨時職員ということで、それぞれ応募はしているのですけれどもなかなか絶対的な保育士が不足しているということで、なかなか公募しても応募する保育士さんがいなかったということで、どうしたらいいかということで、昨年度ですけれども平成30年度に任期付職員で対応したらどうだということで、3年間に限りますが任期付職員の対応につきましては、ほとんど正職員と同じ待遇で給料もボーナスも年休の取り方も在り方もほとんど同じということで、それで募集したところ何名か応募がありまして、平泉保育所、長島保育所に1名ずつ配置していただきました。その成果もありまして、本当はもう少し待機児童もあつたかと思いますが、そのことによりまして、待機児童が減ったということがありますので、今後も何年間の子どもの出生率とか核家族化のことも見据えながら保育士の人数、定員も増やして行ったらいいかどうかも含めまして決定していくことが近々の課題ではないかということで、今挙げております。以上でございます。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。今の課長さんの話について、何か少し聞いてみたいということはありませんか。

(山平委員)

待機児童の話ですが、施設的には、キャパシティ的には、確か対応可能だと思っているのですがあくまでも見る先生の数ですか。

(千葉町民福祉課長)

いずれにしても平泉保育所、長島保育所も定員 90 名ずつのところを平泉保育所は今 120 名から 130 名のお子さんを預かっています。これは、ギリギリ本当に部屋をいっぱい、いっぱい使ってやっているのです、やっぱりある程度、その拡張も含めたことも考えていかななくてははいけません。ただ、今後の短期、長期に渡って子どもを預ける子どもさんが、どのくらいになるかがやっぱり検討していかなければならない。キャパ的な問題は、ちょっともう少し検討していく必要があると思います。

長島保育所につきましても定員に対して 89 名ですので、ギリギリいっぱいです。

やはり、保育所に行ってみますと 0 歳児など狭いところに入っているとやはり面積の関係ではクリアしているのですけれども、実際、そこで保育するとなると平保も含めましてやっぱり無理があるのかなということで考えております。

(岩淵教育長)

よろしいですか。そのほかに、ございませんか。それでは、阿部ひとみさんから、たぶんエリアはすごく広いんだらうなど。乳児から高校生まで今、いろいろご相談に乗っていただいていることもありますので、どうぞ思いの丈をお話いただければと思います。

(阿部適応支援相談員)

宜しく申し上げます。適応支援相談員の阿部ひとみです。

2000 年、平成 12 年から町の子育て支援ボランティアの活動と、平成 15 年から主任児童委員の活動も含めて行っておりますので、今現在、適応支援相談員として今日はここに来ていますが、活動がすごく重複しているところがあるので、そこはご理解ください。

適応支援相談員としての活動をご紹介します。平泉町教育委員会の委嘱を受けて活動をしています。2008 年 4 月から、平泉中学校での活動、月曜日から金曜日が基本です。毎日です。月 1 回から 2 回平泉小学校の方で勤務しています。

2016 年 4 月から、平泉中学校での活動を月曜日から金曜日を基本とし、月 1 回から 2 回平泉小学校だけではなく、長島小学校の方にも勤務日を設けていただき活動をしております。

対応した児童生徒の昨年度の延べ人数です。小学生、延べ 262 人。中学生、延べ 1,428 人。保護者、延べ 629 人。相談、情報共有だとか外部機関で、関わった教職員の方々を含むそのほかの関係機関の方々、延べ人数 1,274 人です。

活動の内容です。不適応対応です。日数にして 198 日、年間 1,200 時間です。

家庭訪問は、これ年度によって違うのですが、平成 30 年度は 161 件、平成 29 年度は 278 件、平成 28 年度は 495 件と、在学している中学生の不適応の状況によって家庭訪問の件数が違っております。

具体的な活動です。小学校の場合、月 1 回の訪問ですので、学校生活を客観的に広い視野で観察させていただいています。その日、小学校に行って副校長先生から、今日、この

クラス、学年の様子を観てほしい。ということを実に確認させていただき、そのクラスに入れていただきます。

先ほど言ったように、結構年数が長いので、「あっ、あの子が気になるな」というのがなんとなく視界に入ってきました様子を観察していくと、こんな時にこんな風な言動が多いとか。こんな時にこんな行動をいつもしているなということが目に付きます。担任の先生に様子を伺うと担任の先生が気づいていらっしゃる場合もあるし、毎日一緒にいるから気づけないこともやはり先生方あるみたいで、ちょっと気をつけてみていただきたいですというお願いをして、帰りに副校長先生にその様子をお伝えします。そういったことで、不適応が懸念される児童の発見対応について情報共有しております。

数年後、やはり気になった子が中学校に来て、やっぱりなとかたちで関わっていることを毎年繰り返しております。

中学校での活動です。①生徒対応です。昨年度まで、用具室として使っていた校舎の一番角部屋を今年度、支援室として環境整備していただきました。そのことによって生徒たちは、不安を抱える生徒ですね、安心して登校、活動できる場所が確保できたことで不適応生徒に限らず小さな不安を抱えた生徒たちの居場所ともなっています。健康面、身体面、精神面等を含む情緒的混乱により、個別での対応が必要な生徒が多いです。先ほどから出ている基本的な生活習慣の乱れも気になります。

返事、分からないで返事をついリズムで返事をしてしまう生徒も結構います。

母子分離不安がやはり強く、私を母親のようにこう懐くとか、すがってくるとか、だっこしてまでは言いませんけど、ぴったり側にくっついてという風な生徒の姿も毎年あります。

低体温、朝の食事を食べていないことが多いので、必ず、「食べてきた」「夕べ何時に寝た」「今朝起きてきた」「宿題も大事だけど、ご飯を食べて来ないと、今日頑張る力が無いよ」という風に毎日の心がけのパターンの一つに入れています。

特に中3は、特に今は部活動も終わりあらゆることに対する不安が消化できない学年です。自分自身をよく理解しきれていない状況となっているために、自己立て直しの支援を考えながら対応しています。安定と積み重ねがとても困難で、その日、その時の状況、生徒の状況に合わせて、今日はどうな感じかなという様子を観ながら状況判断し、柔軟な対応を求められているのだと日々感じうまく対応できているかが私自身の不安となっています。

②家庭訪問です。登校しない、できない理由の聞き取りを必ずします。登校しなくてもいいけど、それは自分的にどうしてなのかなということを必ず言葉で確認するようにしています。今の学校、今日の学校の行事だったり、時間割だったり、こんな風に動こうねという風なことを伝えて登校刺激を与えます。

あとですね、お家の人はいるのですけれどお家の人とは学校に行きたくないとか。お家の人には弱みを見せたくないという風な思春期特有の気質とか状況もありまして、そういった場合は、親御さんに頼るよりもその子の活動する気持ちの方を優先したく、家庭訪問し、一緒に連れてきて登校ということも時々あります。

③保護者対応です。親自身の体験では理解しきれないことや、子どもの意思に左右されることが多いために、家庭と学校との情報共有しながら親の困り感に対応するよう心がけ

ています。子どもとの関わりについての共通理解も場面、場面を捉えて時間を作っています。学校で行う保護者面談に同席することもあります。

④教職員との連携についてです。常に中学校に置いてもらえる状況にあるので、先生方の授業の空き時間に併せて関係する教職員の先生方と情報共有をしています。

あと、副校長先生、校長先生等にも状況を知ってほしいので、活動記録を毎日書いて情報共有を行っております。スタッフ間での対応検討がすごく重要なことと、検討が必要なのですがスタッフの数が増えれば増えるほど情報共有する時間がなくなり、生徒対応を優先するか、情報共有を優先するかこれもすごく悩み苦労しているところです。

⑤活動記録を毎日書いています。生徒の成長が見えさまざまな支援、具体的対応方法を模索するのにすごく役立っていると思っています。

その他、保護者や生徒からの個人携帯電話の相談件数が年々増えております。学校に私がいる時間帯であっても学校の電話に電話すると誰が出るか分からないので、変わってくださいとはやはり言いにくいみたいで、直で個人携帯の方に電話がきます。やはり、かけ直さないと、もう、どんよりした感じで時間が過ぎるのが見えるので、電話が入った場合は、こちらから電話でかけ直して個別対応しているかたちになっています。

活動年数が増えたことで、最近では高校生家庭からの相談も増えています。小さな町ですから、そして2つの小学校から慣れ親しんだ友達の中で生活していた子どもたちが大きな地域に行った時に新しいことや新しい人との対応をすごく苦手とする生徒が増えてきています。大人の相談もあります。不適応を起こした生徒が早くに妊娠、出産、そして離婚。これは、母親の場合だけではなく、男性の場合もあって不適応対応の関わりがうまくもてないことでDVにつながり、奥さんからの相談を受けて離婚に至ったという風なケースも対応しております。

あと、お母さんがうまく育てられないことで、養育の連鎖的なものがあって、親対応の難しさ、確かにそうなのですが、今、関わっている生徒もいずれ親になるのだろうなという風なことを考えた時にやはり一人一人のきめ細やかな対応が必要なんだなという風に考えています。

私の活動のポリシーとして、とにかく関わる、話を聞く、時間を共有するということが心がけています。まず、一対一での関係づくりです。その生徒を分析し、その子の特徴と性格を整理します。それを本人に返します。困っている。手伝ってと言えたことは、手伝いますと、予め言って、自分自身が成長するようなかたちで、支援を行っていきます。やってあげるだけでは成長しないので、あえて失敗し、怒らせたり、泣かせてしまうことがあるのですが、これは成長に必要なものだということを伝えて、話し合うと結構生徒は理解して、そうなんだと自分の中で落ちたみたいで日々成長しています。

保護者との情報共有です。どんな大人にしたい、どんな大人になってほしいということに関わっている生徒の保護者とは必ず確認するようにしています。それは、私の思い描いた大人、イメージ像と、お父さんお母さんが思い描いているイメージ像が違うものとなつては、本来の必要な支援に結びつかないと考えているからです。本人に、特徴とか性格を言葉にして伝え自己分析、自己データの収集をします。言動に合わせて、何回も何回もあなたはこういうタイプだからかもしれないね。あなたが悪くてではなくて、タイプとしてだよということは何度も何度も繰り返しています。

あと、自分がどう思っているのかということを感じられない生徒が多いので、あなたはと思う。どうしたいかということをはなかなか本心は言えないのですが、短い言葉でもいいので、簡単な言葉でもいいので、ということ積み重ね言葉にするようにしています。最初は言えないので、例えばこんな考え方もあるよねということで、いくつか例を出すことで、あっ、これに近い気持ちだなという自分の気持ちが生徒自身整理できていくようです。

その後、自分で決めたことをやはり言葉にさせます。決めたことは、例えば簡単なことであつたり、ちょっと違うなと思ったことでもとりあえず需要します。やってみます。できたら褒めます。間違っていたら、どこが間違っていたのか一緒に聴きます。そして、やってみようだったということ必ず振り返ります。間違った行動をした時は、失敗した行動をした時は、どこがどうで間違ったかを整理してみようということ書き出します。書き出して、この時こうだったんだね。じゃあどうしたらいいかなということ言葉だけではなく、メモ書き、付箋等を使うことで、自分がどう思っているのか整理がつくようです。

そういった個別対応しているうちに、段々、対大人ではなく、友達との関わりを求めてきます。小集団、2、3人の関わりをまず安定させ、そこで練習を重ね、次、クラスに行ってみようという風なかたちで段階をおって集団の中に入れるような支援を心がけています。

その中では、不安、失敗行動を繰り返します。書き出し行動を何度も整理します。自分の特徴を確認し、照らし合わせることを何度もします。イメージ、対応を一緒に考えます。そして、行っておいでという風な送り出し、見守りを続けています。このことで、ステップアップでき、自己肯定感の確立がなされ、卒業して行ったはずなのですが、やはりもうちょっと関わりたいと思った生徒は、高校になってやはり行けてないということで、連絡が来て、じゃあまたどこからかできることはないかなというかたちで、また、次、自分が取り組みそうなことを一緒に探すということを繰り返しています。親御さんたちといろいろ話をする中で案外知らないわが子の姿というのが、親御さんたちの中であって、お母さんたちにお話するのはわが子に知っていてほしいことが、「食べること、どんなものをどんな風にどれだけの時間をかけて食べる子なのか知ってる」「遊ぶ、どんなものでどんな風に誰とどれだけ集中して遊ぶ力を持っているの」「寝る、何時にどんな風にしてどのくらいの時間の睡眠ですっきり目覚められる子なの」って聞くと案外知らないです。親御さんの思い込みでこの子はこうなはずと思っていたことで、思春期になり親の期待する姿になれない自分を責めて、まあ起きて来なかったり、教室に行けなかったり、何もする気になかったり、スマホを使っての外でのつながりを求めたりと私からすると子どもは弱者だなと感じ、毎日活動しております。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。内容的には、かなりたくさんのお話をさせていただきました。いろいろお聞きしたいことがたくさんあるのではないかと思いますがいかがでしょうか。

(本澤委員)

聞きたいことというか、まず、ひとみさんのお話を聞いての感想です。以前は、こういう、ひとみさんが本当に細々再度に渡ってくださっていることを学校の教師が、私自身も常に不登校の児童とかもたされた経験が10年以上ありまして、何人も扱ってきましたけど先生方がやること。授業もしながら学校の教育活動もしながら一人一人の子ども

の対応もしていかなければならない。生徒指導の先生とか養教さんとか助けられてやってきましたけどすごく本当に今の先生方は阿部ひとみさんの力にすごく助けられていると思いました。すごい活動力だなと思いました。以上です。

(三澤委員)

学校区が2つしかない。小学校2つに中学校1つだけという話になるのですが、いつも何かと。でも、私が普段から聞こえてくるのは、阿部さんはものすごく過密状態で、それこそいつ寝ているのかな。子どもたちのようにいろんなことが不規則な、不形態なかたちが定まらない。いろんなケースが、もう、夜、昼となく関係なく入ってきて、こういう風なかたちで生活して仕事しているというのは。実は単純なんです。人が足りないんじゃないかと。これは、2人も3人もほしい仕事じゃないかなと思う。学校がすごく忙しくなってきたという話はよく聞いて、働き方改革とか言われていますけれども、やはりそういったことで改革されてる部分があるとその分今度は、そういった忙しいのが被ってくるという風なことが表れているなど。でもこういった仕事というのは、コンピュータで処理したりなんかできるものじゃないので、あんまり人がいても困るのかな。やっぱりお母さんの存在というのがいろんな人達が入り替わり立ち代わり、今日はあの方が休んでいるから今日は誰々という風に変わるのが簡単にできるものでもないのかな。いろんなことが思う。でもやっぱり人が足りないのではないかな。そういったところに結局は尽きるのですけど。どういうものなのかなという感想です。

(阿部適応支援相談員)

忙しいのは確かにそうです。でも、今、三澤さんがおっしゃったように、人が変わると生徒も違う姿をみせるんです。それがいいのか、悪いのかは別として基本はやはりお家なんだろうなと思い、ここから民生委員の部分なのですが、お母さんにやっぱりこの子大事だな。この子の笑う顔。幸せを感じたいなという想いを早い時期に確認してほしく、民生委員で赤ちゃん訪問をはじめました。それは、お母さん、訪問した時に、私たちは子育ての応援はできるけれども、この子にとって一番エネルギーを与えるのはお母さんだからねということをお早い段階から伝えたいためです。そして、必ず赤ちゃんを抱っこさせてもらいます。そして、リラックスしている赤ちゃん、力が入って抱かれることに違和感を覚える赤ちゃん、最近では増えてきている。これってお母さんがすごく緊張しているんだなという風なことをすごく感じます。赤ちゃん訪問を3年経ちましてだいぶ浸透してきたことと、同行していただく地域の民生委員さんも柔軟な対応をしてくださるので、赤ちゃんとお母さんが私。民生委員さんは、同席している家族とみたいな感じでお母さんとリラックスしてお話を30分くらいしてくると、だいぶお母さんの表情も和らぎ、そして子育て支援の活動がいろいろあるからね。私たちも行って待っているからねという風な声かけをして帰ってきて、ピョピョだったり、アピユイだったり、のびのびの活動に来ると「ああ、よく来たね」という風なかたちでうまく子育て支援の活動につなげられたお母さんは、すごく子どもに自分のスピードを押し付けずに子どものペースに併せながらどう成長しているかなと考えることができるお母さんになっていけると信じています。

(岩淵教育長)

そのほかに、教育委員さんだけではなくてここにいる方々で、いろいろお互い伝えたいこと。情報を共有したいことがあると思いますので、どうぞ。

(佐藤平泉町立幼稚園長)

ひとみさんの話を聞いてやっぱり一番は、親との関係づくりが大切なんだなと思ってはいますけれども、もちろん、改めてやっぱり一番欠けているところは、スタートはそこなんだろうなとすごく感じました。やっぱり、子どもを持った親の責任というところで、やっぱり生まれた時から、ただ、ただ友達のように可愛い、可愛いだけではやっぱり、育てるというのにはつながらないなという。やっぱり、自分の子どもが自分の思い通りにではなくてこの子はどんな風に育ててほしいとか、さっきもお話しました目標と言ったのですがやっぱり、一つの親としての子どもを育てていく上でのこんな子どもになってほしいなという想いを持って、じゃあどんな環境を整えたらいいのかなという風に、やっぱり幼稚園、保育所だけではなくて、保護者も親も一緒になって子どもの先のことを考えて育てていく。そういうところをやっぱり私たちが伝えていかなければどんどん増えていくのかなという危機感がすごくお話を通して感じました。

それから、幼児期における経験の不足がやっぱり大きいのかな。自分でやって、やったという達成感だったりとか、失敗した時も「いいんだ。いいんだ。自分はこのくらい頑張ったのだから。」という一歩前に進む力とかそういったのは、小さい時の経験なのかな。失敗しても許されるうちにやっぱり多くのことを経験するということは、大事なんだろうなというところ。すごく感じたので、今日この話を持って帰って先生方とさらに子どもたちにどういう経験をさせたらいいのか、あとは保護者の保護者支援、やっぱり一緒に子育てを頑張りましょうというところをお話していければなと思い、感じたところです。ありがとうございました。

(岩淵教育長)

そのほかに、ありますか。

(阿部適応支援相談員)

親御さんの意識の二極化がすごく進んでいると感じています。意識の高い親御さんと、働きかけられてもうまく自分のものにしきれない親御さんと、ギャップがすごく広がっていて、同じにすればいいと云う問題ではもちろんないのですが、どうせ自分なんかという言葉を聞いてしまうとすごく悲しくなります。

今、園長先生がおっしゃったように、結果だけではなくどれだけどんな努力をしたかということ認められる町であってほしいな。なかなか頑張れない。結果だけを認められるのがすごく増えてきたので、「いつもあの人なんだっけ」とか、そういうことになっちゃうとやる気もなくなってしまうのだろうなというのがありますし、共稼ぎの世帯が増えて学童の位置づけというものがすごく大きいと感じています。学校で先生方が子どもに対応するよりも学童に迎えをきて、学童でどんな生活をし、どんな風にスタッフに対応してもらったかがリアル親御さんは、目につきますよね。学校でこうだよねと、例えばこういったことはしていきません。でも、それが学童に行って学童の生活がどんな風に過ごされるかでやはり子どもは忘れやすいので、自分に都合のいい情報だけが残りがちですから、学童の位置づけというものがすごく大きいだろうな。親代行的なことをやってくださるのは確かに有難いのですが、本来やらなければならないことを替わってやってしまっただけでは、親御さんが親になるチャンスを私は取ってしまうんじゃないかなと。本来の学童の姿ってなんだったのかなというところをもう一度確認してほしいなという風に考えています。

(青木町長)

今のお話の中で、親御さんの二種類の形態があると前段でお話しましたよね。その中で、どうせ俺なんかというのは、子どもさんですか、親ですか。

(阿部適応支援相談員)

子どもさんです。これは、地区懇談会に出てもすごく感じたのですが、地区懇談会にきている親御さんたち、お母さん同士でやっぱり来た人、来ない人、批判する声が何となく聞こえてくるんです。「あの人たちはいつもね。」とか。来ていない人たちを。そして、それを言っているのは、ある程度子どももいろんな活動が順風万端に行われ、生活もそう困ってはいないお母さんたちが、来ていない親御さんたちをコソコソっと言うのが聞こえた時には、「ああこれ家に帰ってこういうこと言ってなきやいいけどな」とか、「どうせあそこの家は」。

スクールカーストという言葉をご存知ですか。スクールカースト。これは平泉でもあると思います。学校内での理不尽な序列と言われるものです。できるものと、普通のもの、そうではないもの。これは、暗黙の了解で「あの子に目を向けられたら誰が守ってくれるの」「教室行けない」というものもあります。これって、子どもだけではなく大人の世界にもあるだろうなということと、例えば地区懇談会に出れていないお母さん、子どもに応援したいけど応援できないお母さんの状況って、結果は来ていないだけなんですけど、来れない状況って何かあると思うんです。仕事が抜けれないとか、子どもを預ける場所がないとか。あとは、大勢の人が苦手、そこに行けないとか。何か振られたら自分は何て言っているかわからないとか。できないのはなぜなのかなと。言葉にしない不安のメッセージを感じ取ることってやっぱり今必要なんじゃないかな。行った人は何でも言います。私みたいに。何でも言える人と、思っていると言えない人がやっぱり社会の中にはいて、スクールカースト、そうだな、大人の世界もスクールではないけれどそういったものが、今、世の中こうですから、特にもそういったものが親の社会にも子どもの社会にも出てきているのかな。なので、やっぱり、すがって来た子には全力で応援したいです。いくら自分が忙しくても。だって困ったって言えることはすごく大事な事だだと思います。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。残り少なくなってきたのですが、とんでもない膨大な情報が頭の中に入っていますので、それはそれとしてせつかくの機会ですから、みなさんのご意見等をお聞きしたいと思いますがいかがでしょうか。

(本澤委員)

今のお話を受けてですが、学校がそもそも一人一人をちゃんと認めてあげないと。分かりやすい言葉で言うと不公平の反対、公平なんです。どの子も同じで、じゃあその不公平さをどこで埋めていくかと言ったら、例えばある程度勉強ができたり、スポーツもできたり、抜き出て目立つ子じゃない子どもたちをどこで公平まで引き上げてあげるかは、その子の得意なもの。必ずあるんです。その子の良さ。そういうのを学級の中、学級づくりの中でやっぱり教師がはっきりとほかの子どもたちに認めさせる。「誰ちゃんだってこういうこと素晴らしいでしょう。」ということ。同じなんだよということとその学校、小学校、中学校の役目だと思います。

そこを親にも家庭にも「お宅のお子さん、今日こんなにいいことをしたのですよ。」と、みんなにも認められていますよと。日々、私は一番コミュニケーションを取るのは、例えば学級通信とかではなくて、こまめに親御さんと連絡を取るの、連絡帳、一言毎日気になる子には。全員でなくていい。もちろん。そして、親からの返事をもらう。担任と親とのやり取りとか、そういうのを日々、今も先生方頑張っているのかなと、ちょっとその辺が公平さにもっていかうか、みんなちゃんと頑張っていて、みんな素晴らしいところがあるのよと、そういう認めてあげる。それを助けるのが、例えば道徳の授業だったり、すべての授業もそうです。体育の授業から遊び時間に教師が担任が子どもと一緒に遊ぶ。サッカーをしたり、そういう時に、「誰ちゃんすごいね。」と、普段は目立たない子をポツと褒めてあげたり、そういうところを学校では頑張ってもらいたいです。地域は地域で、やれることを頑張っていきたいですし、ひとみさんのような人達にも助けてもらいながら補助をしていただいている。今、連携ということも思いました。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。長島小学校の校長先生何かお話ありませんか。

(高橋長島小学校長)

学校、小学校も中学校も授業日って、どんなに多くても全体の7分の4です。学校に長くて8時間いても3分の1です。かけると21分の4です。すなわち5分の1弱です。学校にいるのは、1年間の中ですよ。そして、5分の4は、学校以外のところにいるんです。

ただ、学校はいかに大事かという、子どもの中の社会と言った時、学校だからです。

社会性を身に付けるために、ほかの子ども、ほかの大人との関わりをもって、子どもたちの自我を育てていく。自立させていくという部分で学校はすごく大事なのですが、さっき言ったような自尊感情といったようなものは、やはり家にいる親やおじいちゃんおばあちゃんやそういう人とのつながりの中で育っていく部分が大きいのではないかなと思います。だって、子どもはそのうち5分の2は寝ているんです。そうすると残り、5分の2です。5分の2が家です。すなわち、学校の倍近くいるわけです。夏休みとかは家にいるわけですからね。休みの日は、一日家にいるわけですからその中で、どのくらい親が子どもと関わりを持てるのだろうか。そういうのは、学校から言うと学校が要求してきているように思ってしまう。こっちはそういうつもりでなくてしゃべっても学級が、学校が、校長がしゃべると、家庭に対する要求で言っているのだなと思うと思うのです。そういう時にやっぱり、ひとみさんのようなあったかい、いろんな話をしてくれるのは、大きいと思います。親が構えて聞くか、あるいは構えを少しずつ取っていくか。それは、親がいろんな人の話を聞こうという気持ちに心を働かせるような、そういう意味でのひとみ先生のような方が親と関わっていくというのがすごく大事なことでないかと有難いなと思っています。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。チャイムが鳴ってしまいましたが、まとめることもできないかたちですけれども、いずれもう一回これを7枚に渡ってみなさんのメモを取りました。

これをもう一回読み直して、少し整理をしながら一番最初に何ができるか話をしたのですが、果たしてどこまでそれが叶えられるかまとめられるか分かりませんが、委員会内で少し整理をしながら、そして改めて町長さん、それから教育委員さんにはこういうか

たちでこういう部分というお話をする場面をつくりたいと思います。そういうかたちでご了承していただきたいと思います。最後に町長さんから一言お話をお願いします。

(青木町長)

今日は、2時間という限られた時間でしたけれども、委員のみなさま、そして今日足を運んでいただきました各施設、支援員のみなさん、校長先生ありがとうございました。このテーマを今回は、以前も行った経緯がありますが、今回やろうとしたのは、教育長からも話を聞いていたのは、阿部さんが話をしていただきましたが、結局、阿部さんが家庭まで行って起こしてそして連れてくる。そして、来なければまた行って、寝ているところから起こして聞いてくる。連れてくるというお話を聞いた時に、先ほど三澤先生からお話があったように、やっていることはものすごく大事なことですごいのだけど、そこまでやらなきゃいけないという現実があると言いながら、本当にそこまでやらなければならないのか。もっとやるのは、家庭ではないのか。今、校長先生からも話があったけれども、子どもに語って起きて来ない。親は仕事に行かなければならない。もちろん、経済的にも働かなければなりません。しかし、家庭は家庭でやる。ここまでは、家庭がやるべきだということをやらないで、やらないでと言うと語弊があるかもしれませんが、できないと言えばいいのかな。そして、支援員が来て連れて行ったりする。果たしてそれをやって行ったらどこまででも働き方改革ではなく、阿部さんだけ大変で、学校との連携はどうなっているのか。やはり家庭は、家庭の責任がないとこれはできない部分じゃないかなと、ものすごく私の中ですごく危機感があってですね。今回は、こういう話題で学校の話で、現場の話を聞いたらどうかという話で教育長からの話もあって、今回こういう機会を設けさせていただいたのですが、いずれ今日はみなさんでお話をして聞きましたし、また驚いた部分もいっぱいあると思いますし、私自身の中でも全然まとまりなく話をしている状況ですけど、いずれ今日の総合教育会議をですね、また今度、第2回目として、更にまたみなさんを仕えて自分なりに整理しながら、私の前段の挨拶で話をしたように、お互いがそこをきちっとこの中でも共有して、こういうことを町として、例えば家庭教育をもっと家庭の責任としてやらなければならない。例えば、阿部さんが言ったように小学校の時はこうだったけども中学校で会ったら「やっぱりな」と、こうお話ししましたね。一番最初に。その「やっぱりな」と言ったところ、どこに責任があれなのかというと、やっぱり自分がどこか分かっていると思うんです。そういったところも出しながら、なぜ就学前のまさに0歳児から、抱っこする時から、おそらく民生委員の中でも今度0歳児の訪問をしようと始まったのは、そこからみな関係付けてやっているのではないかという疑問にある意味到達したから民生児童委員の中でも始めた活動ではないかなと思います。そういった部分も含めながら町として、取り組まなければならないことをみんなで次の機会にこういったところを集中的にまた議論していただきながら決めていきたいなという風に率直に感じたことを最後にお話させていただいて、私からは述べさせていただきます。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。それでは、これで閉じたいと思います。繰り返しになりますが宿題をたくさんいただきましたがそれを何とか夏休み中に休み明けまでには何とかしたいと思いますので、宜しくお話ししたいと思います。

令和第1回の総合教育会議を閉じさせていただきたいと思います。では、ありがとうございました。